

次の改訂に向けて、議論をコミュニティ内で積み上げていくことの重要性が指摘されました。

会場からは、学校教員をどのように育てていくべきかについても、発言が相次ぎました。教員養成系の大学でも、月の満ち欠けの仕組みを4割の学生が説明できないと答え、残りの6割も、その半分の学生は誤った理解をしているそうです。このような状況の中、天文学や物理学の基礎レベルを上げていくと同時に、そもそも科学的思考力の前提となる読解力を高める必要性が指摘されました。それに資する活動として、JAXAによる宇宙連詩など、文理融合型の取り組みが紹介されました。また、観望会などに学生を連れて行くことで、活きた知識を身につけさせる事も有効な手段であるとの指摘もされました。

学校教育においては、地学分野の存在感は

ますます低下しており、いつ無くなってもおかしくない状況にあります。理科教育の中でも、天文分野がリーダーシップを取って進めていくことが重要である、そのような発言が最後にありました。今回のフォーラムがきっかけとなり、議論が進んでいくことを期待したいと思います。

高梨 直紘

コラム 冬が始まる日

松村雅文（編集部）

去る11月7日は立冬でした。日本を含め東アジア文化圏では、立冬は、冬が始まる日、ということになっていますが、英語圏では少し事情が違うようです。”The first official day of winter”を「冬が公的に始まる日」と訳して正しいかどうか自信がありません（ここでのofficialの意味がどうも判らない）が、この「冬が始まる日」は、冬至の日、ということになっているそうです。うそだと思ったら、”first day of winter”などの言葉で、ネットで検索してみてください。北半球での冬の最初の日は、winter solstice（冬至）の日であり、12月21日か22日頃であるといった説明のページが、沢山出てきます。それにしても、立冬は太陽の黄経が225度、冬至は270度ですから、45度（つまり45日）も違います。この違いは大きいですね。

ところで、立冬や冬至などは二十四節気の一つですが、最近、日本版の二十四節気を作ろう、という議論が日本気象協会で行われているそうです。「二十四節気は昔の中国で作られたので、必ずしも今の日本の実情には合わない」ことが理由とのこと。新しい二十四節気は、どのような風情のものになるのでしょうか。